

23)「土佐之国史料類纂皆山集」第9巻「高知市街誌稿」より引用。

[参考文献]

- 大脇保彦「高知城下町絵図について－歴史空間の情報源としての吟味と課題」『土佐女子短期大学紀要8』
土佐女子短期大学2001
- 寺石正路『土佐名家系譜』歴史図書社
- 『土佐国史料集成－南路志』高知県立図書館平成6年
- 『土佐之国史料類纂皆山集』高知県立図書館昭和48年
- 『土佐国史料集成土佐國群書類』高知県立図書館2006年
- 『御侍中先祖書系図帳』土佐山内家宝資料館
- 『高知城下町読本－改訂版－』土佐史談会・高知市教育委員会2004年
- 『特別展－絵図の世界』安芸市立歴史民俗資料館1998年

[繪図出典その他の]

- No.1)『正保城絵図』国立公文書館内閣文庫所蔵。
- No.2)『慶安五年高知郭中絵図』高知市立市民図書館所蔵。
- No.4)『寛文己酉高知絵図』高知市立市民図書館平尾文庫所蔵。
- No.5)『元禄二、三年間之図』皆山集稿本所載。
- No.6)『元禄百年至十二年間之図』皆山集稿本所載。
- No.7)『高知城郭内図絵』高知県立図書館所蔵。
- No.8)『延享三年之図』吉松靖峯氏所蔵。吉松清氏による現代の写し。県立図書館所蔵の同年絵図と内容が共通する。
- No.9)『寛延年間頃高知城下郭中之図』吉松靖峯氏所蔵。吉松清氏によって写されたもので、「高知城復元上棟祭資料展示前に築居敷住の萩野成實氏蔵の図より写す昭和廿九年四月六日吉松靖容』の奥書きを伴う。
- No.10)『天明年間前後高知絵図』吉松靖峯氏所蔵。吉松清氏による現代の写し。
- No.11)『高知御家中等龜図』安芸市立歴史民俗資料館所蔵。文化8年の写し。
- No.12)『天保元年高知之図』吉松靖峯氏所蔵。吉松清氏による現代の写し。高知市発行『図録高知市史』より転載。
- No.13)『土佐国高知城下町絵図』国立公文書館所蔵。竹内重意が大保12年に作図との奥書きあり。『中・四国の市街古図』鹿島出版会昭和54年より引用。
- No.14)『弘化年間旧郭中絵図』町田尚友氏所蔵。高知市発行『図録高知市史』より転載。
- No.15)『天保二年後古圖廓中』高知市立市民図書館近森文庫所蔵。
- No.16) 安政5年(1858) 郭中図...複写資料を高知市立市民図書館所蔵。「安政五戊午年夏口製同庚申暮春写之ト
有慶応四年戊辰春写之」の奥書きを伴う。
- No.17) 文久3年(1863) 絵図 皆山集稿本所蔵。
- No.18)『高知郭中図』『高知城下町読本－改訂版－』土佐史談会・高知市教育委員会2004年より転載。

Tab.17 絵図・史料にみる高知城跡西側の変遷

No.	掲図番号	年代	資料名	新西側 南北の記載	福南西角 外側の記載	南北路 南北めの記載	所蔵・引用	資料の性格・備考
1		正保年間 (1644～1645)	『正保城絵図』	「侍屋敷」	空白	-	国立公文書館 内閣文庫所蔵	幕による幕府差し出しの絵図。
2		寛安5年 (1652)	『寛安五年高知郡中繪 図』	「侍屋敷」	-	-	高知市立市民 図書館所蔵	幕による幕府差し出しの絵図の 控え。
3		寛永元年～ 万治2年推定 (1624～1659)	『井町小割帳』	「沼津支連」屋敷	「御屋敷下やしき」	-	-	-
4	Fig.47 - 図1	寛文9年 (1669)	『寛文己酉高島絵図』	「福岡内造」屋敷	界で囲んだ屋敷の絵	-	高知市立市民 図書館平尾文庫 所蔵	-
5	Fig.47 - 図2	元禄23年 (1699～1700)	『元禄二、三年間之図』	「長屋」屋敷	「御下屋敷」	-	皆山集稿本所蔵	松野尾草行による、近代の写 し。
6	Fig.47 - 図3	元禄10～12年 (1697～1699)	『元禄自十年至十二年 間之図』	「長屋添工夫」屋敷	「御下屋敷」	-	皆山集稿本所蔵	松野尾草行による、近代の写 し。
7		延享3年 (1746)	『高知城跡内因縫』	「西岸は黒色帶表 記（縄地、上手か） 西側は「西大門坂 小路」	空白	-	高知県立図書館 所蔵	周囲の絵図と内容が同じ。
8	Fig.47 - 図4	延享3年 (1746)	『延享三年之間』	「西岸は黒色帶表 記南北筋に「西大 門坂小路」	空白	-	吉松鶴峯氏所蔵	吉松鶴峯氏による現代の写し。保 持南北筋に「西大 門坂小路」
9	Fig.47 - 図5	寛延年間 (1748～1751)	『寛延年間領高知城下 郭中之内』	「西の西岸は緑色帶 表記	空白	-	吉松鶴峯氏所蔵	吉松鶴峯氏による現代の写し。
10	Fig.47 - 図6	天明年間 (1781～1788)	『天明年間前後高知城 図』	「西の西岸は黒色帶 表記	空白	-	吉松鶴峯氏所蔵	吉松鶴峯氏による現代の写し。
11	Fig.48 - 図7	享和元年 (1801)	『高知御家中等図』	「西の西岸は記載な し南北筋に「西大 門坂」	空白	「御庭」	安芸市立歴史 民俗資料館所蔵	文化8年の写し。
12	Fig.48 - 図8	天保元年 (1830)	『天保元年高知之図』	「西岸は縁地	「御番所」書で囲ん だ敷地と建物の絵	「御庭」「馬場」 「□□役御門口 御料役」	吉松鶴峯氏所蔵	写し。
13		天保12年 (1841)	『土佐国高知城下町繪 図』	「西岸は緑色帶表 記南北筋に「東小 路」	空闇と建物の絵	「御庭」	国立公文書館 所蔵	竹内意章が天保12年に作図と の免査あり。
14	Fig.48 - 図9	弘化年間 (1844～1848)	『弘化年間旧高中繪図』	「新御馬場」	界で囲んだ敷地の絵	「御庭馬場」	町田尚友氏所蔵	写し。
15		天保2年以降 (1831)	『天保二年後古圖書中』	「新馬場」	「新番所跡」	「御庭」	高知市立市民 図書館近江文 庫所蔵	写し。
16		安政5年 (1858)	新中間	「新馬場」	「新番所跡」	「御庭」	複写資料、高知 市立市民図書館 所蔵。	「安政四年に写す」の免査あり。
17	Fig.48 - 図10	文久3年 (1863)	新中間	「新馬場」	-	「御馬場」	皆山集稿本所蔵	近代の写し。
18	Fig.48 - 図11	幕末頃	『高知御中圖』	「西岸は縁地西側 は「新馬場」南北 筋に「西大門」」	「住吉神社」	「御馬場」	-	-



図1 「寛文己酉高知絵図」寛文9年(1669)(高知市立市民図書館所蔵)



図2 「元禄二、三年間之図」
元禄2・3年(1689~1690)(皆山集稿本所蔵)

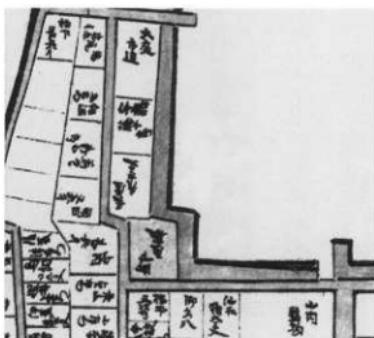


図3 「元禄自十年至十二年間之図」
元禄10~12年(1697~1699)(皆山集稿本所蔵)

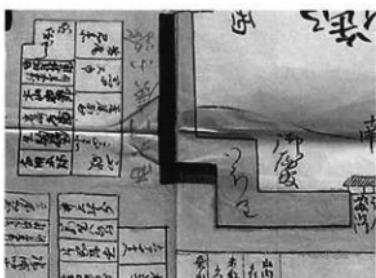


図4 「延享三年之図」延享3年(1746)
(吉松精峯氏所蔵)



図5 「寛政年間頃高知城下郭中之図」
寛政年間(1748~1751)(吉松精峯氏所蔵)

Fig.47 絵図にみる堺西側の変遷(1)

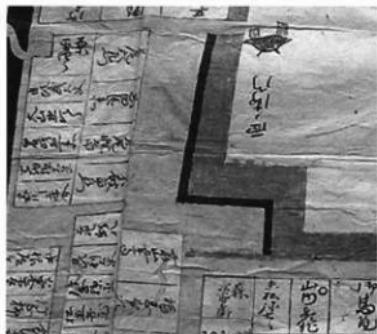


図6 「天明年間前後高知絵図」
天明年間（1781～1788）（吉松靖峯氏所蔵）



図8 「天保元年高知之図」天保元年（1830）
（吉松靖峯氏所蔵）

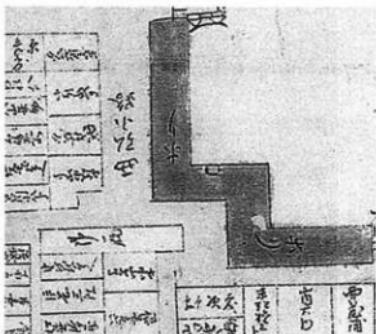


図7 「高知御家中等龜図」享和元年（1801）
（芸芸市立歴史民俗資料館所蔵）



図9 「弘化年間旧郭中絵図」
弘化年間（1844～1848）（町田尚友氏所蔵）



図10 文久3年（1863）絵図
（青山集稿本所蔵）



図11 「高知郭中図」幕末頃
（ベン字を活字化したもの。『高知城下町説本』より転載。）

Fig.48 絵図に見る堀西側の変遷(2)

史料一『侍町小割帳』(抜録)

(A)

御屋敷筋西ノはしより北川立町

御屋敷筋

西大門立町東のはし北川

平井數馬

野中主計

四拾間半南横筋四間五尺

御やまと堀ノ長サ

一武拾九間

百三十平兵衛

福岡圖書

一七拾九間五尺七寸

福岡圖書裏

一武拾三間

西一香北南横筋東北のはし

馬淵八右衛門

一百七間

野々村大学

一三拾武間

岡村平次

五十間

山内市正

一武拾六間

前川弥次右衛門

五拾巷筋

高屋所左衛門

日野新七

鳥羽左源次

三拾間

百三十刑部

石川道播

西野弥五右衛門

三拾間

山内左衛門住

木村作右衛門

上野長兵衛

一拾間

寺田太左衛門

長瀬次左衛門

馬場忠左衛門

一拾間

柏原太郎兵衛

小坂彌之丞

仙石忠右衛門

一九間

近藤仁左衛門

東野新七

東野新七

一九間半

北川義後

石川道播

木村作右衛門

一九間五尺

岡田作左衛門

日野新七

日野新七

一拾間

市川左衛門

木村作右衛門

一拾間

中ノ内五郎兵衛

木村作右衛門

一九間半

金子宮九左衛門

木村作右衛門

一九間五尺

馬場忠左衛門

木村作右衛門

一拾間

片岡八兵衛

木村作右衛門

一拾間

野々村少左衛門

木村作右衛門

メ五百拾七間四尺四寸五分

……(中略)……

(B)

西大門立町東のはし北川

平井數馬

野中主計

一武拾九間

百三十平兵衛

福岡圖書

一武拾三間

西一香北南横筋東北のはし

馬淵八右衛門

一三拾武間

岡村平次

一三拾巷間

前川弥次右衛門

一武拾六間五尺

日野新七

一武拾武間

馬淵八右衛門

一武拾三間

安藤宇右衛門

メ九拾三間五尺

沼津玄達

……(中略)……

(C)

野中主計

福岡圖書

鳥羽左源次

馬淵八右衛門

西野弥五右衛門

前川弥次右衛門

日野新七

石川道播

木村作右衛門

上野長兵衛

長瀬次左衛門

馬場忠左衛門

小坂彌之丞

仙石忠右衛門

東野新七

木村作右衛門

日野新七

木村作右衛門

右御侍屋敷小割帖年曆相記し無之二付、時代難考候得
共、仙石忠右衛門・商宮九左衛門・岡士之屋敷有之ヲ以、
考に候處、寛永より万治の年間御改正明亮也。其證如
左。

寛永元年於江戸、御召家へ被召抱、仙石忠右衛門。
万治一年百姓と出入有之。他國へ御職被遣、商宮九
左衛門。

文政三年亥九月十五日等之。

西大門立町東のはし北川

西大門立町東のはし北川

第2節 高知城跡西堀地区、検出遺構の性格

はじめに

高知城内堀の外で行われた近世遺跡の発掘調査は、平成13年度に高知県埋蔵文化財センターが行った高知城伝下屋敷跡^(注1)の調査がまず挙げられる。その後、平成17年度に高知市教育委員会が内堀の西側で行った高知城跡西堀地区旧営林局跡地点^(注2)の調査、高知地方裁判所北側の敷地で行った今回の平成19年度調査と続き、高知城の内堀の範囲や内堀西側での近世遺跡の様相が、序々に明らかになってきている。

今回の調査は学術目的の試掘確認調査ということで、試掘坑内に限定された部分的なものであり、また既存建物の基礎を残しての調査という制約もあって、明らかに出来たものは全体の一部にしか過ぎない。しかし、各試掘坑では高知城の内堀跡や近世前期から後期の遺構と遺物が検出されており、内堀西側での各期の土地利用の在り方を知る、新たな手掛かりが得られている。

これらの調査成果をまとめるにあたり、以下では、史料から知り得る遺跡の立地や周辺の発掘調査成果なども照合させながら、検出遺構と遺物の性格について検討しておきたい。

1. 高知城内堀跡について

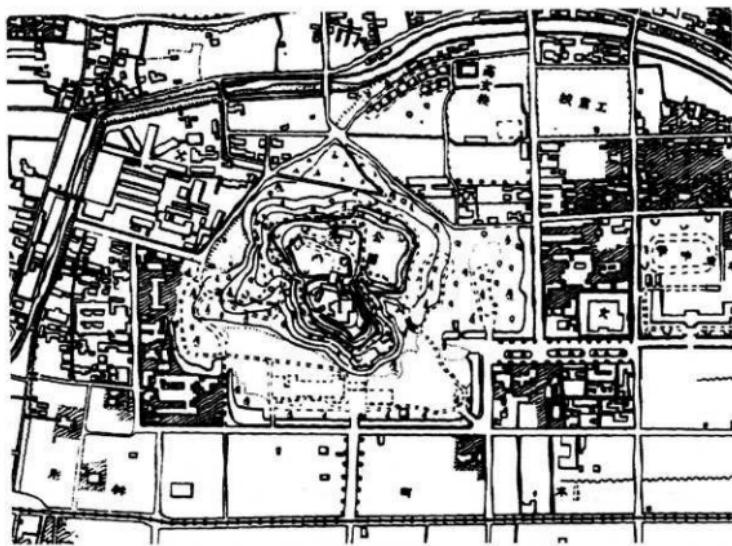
調査成果と近世内堀跡の復元

現在、高知城の内堀は、南側は堀幅を狭められながらも現存するが、西側と東側の堀は、終戦直後、空襲で被害を受けた市街地の瓦礫を処理するにあたって埋め立てられ^(注3)、現在は東の堀跡が藤並公園、西の堀跡は営林局と裁判所北側の敷地となっている。埋め立て直前の内堀の姿を知り得る資料としては、和田幸盛氏所蔵の昭和20年戦災図^(注4)(Fig.50)があるが、ここには改修等によって規模を縮小した東西内堀の姿が描き出されている。

この様に、近代以降の改修や埋め戻しによって内堀はその姿を変容させているが、近年の発掘調査によって、近世内堀跡の様相が少しずつ明らかになってきている。まず、高知城の南東にあたる丸ノ内緑地では、平成17年度に試掘確認調査^(注5)が行われており、ここでは、堀内側の岸部分の4箇所で土手状遺構が検出され、近世絵図の記載に同じく、堀内側の岸が土手を伴うものであったことが報告されている。また、西側の堀については、平成17年度旧営林局跡地点の試掘確認調査で、2箇所の試掘坑から内堀の西岸跡が検出されている。

今回の調査区は旧営林局跡地点の南側に位置しており、調査区東部に設けた5箇所の試掘坑(TP1～5)で内堀跡を検出し、このうちTP3で西岸と近代以降の改修に伴うとみられる石垣、TP2で南岸付近に設けたとみられる近代以降の石垣を確認した。TP3で検出した堀西岸と石垣は南北方向に延びており、北側の旧営林局跡地点で検出された堀跡西岸とも、位置関係が対応している。

そこで、今次調査区と旧営林局跡地点での堀西岸検出位置を、現代の市街地図^(注6)上に落とし、近世の堀西岸の推定ラインを加えたものがFig.49である。これによると、内堀の西岸は南北方向に延びた後、本次調査区と南側の現地方裁判所敷地との境界付近で東西方向に向きを変えており、この南岸は現在の高知裁判所敷地内にあると予想される。



絵図にみる近世の内堀とその構造

ところで、西側内堀の規模については、幕府差し出しの絵図である正保年間（1644～1648）の『高知城絵図』^(注7)や、幕府差し出し絵図の控えとされる慶安5年（1652）の『慶安五年高知郭中絵図』^(注8)等にもその規模や形態が記されており、ここからも当時の内堀のあらましを窺うことができる。このうち『慶安五年高知郭中絵図』では、搦手門から堀南西角までの間に「堀長百五十八間廣十二間深七尺」の記載が見える。また同絵図からは、東側の内堀は城郭側の岸が土手を伴うものであったことが分かるが、西側の内堀については土手の記載は認められない。また、西堀は搦手門から南進した後、南西角の手前付近で一旦東方向へ曲線的に曲がり、その後再び南進して南西角に至るように描かれている。

次に宝永年間（1704～1711）の写しとされる『高知城図絵』^(注9)では、搦手門から堀屈曲部までの間に「堀長八拾壹間幅拾間」、堀屈曲部から東西方向に「堀長四拾貳間幅拾間」、南北角までの南北方向に「堀長四拾壹間半幅拾間」とあり、堀長や堀幅の記述に若干の違いが認められる。また、南西角付近での内側の岸には土手に関わる記載が認められる。

一方、蕃撰図と推定されその製図法の巧緻さが評価されている^(注10)寛文9年（1669）の『寛文己酉高知絵図』^(注11)では、規模の記載は無いが、堀の構造や周辺の施設について細かな描写がなされている。同絵図では西堀は南西角の手前付近で一旦東方向へと直角気味に向きを変え、その後南進して南西角に至るよう描かれ、正保年間の『高知城絵図』や『慶安五年高知郭中絵図』と違いが表れている。また、城郭側の岸（東岸）には薄緑で彩色された土手と堀の絵が描かれ、南西角付近の堀では、南西角外側の屋敷と城内との間に架かる橋が北岸と南岸に描かれている。一方、侍屋敷側の岸（西岸）については土手や堀の記載が無いが、同絵図では城郭や藩関連の施設が詳しく描かれるのに対して侍屋敷部分の記載が簡略化される傾向があるため、実際の西岸がどの様であったかについては詳細が得られない。

各々の絵図について性格や記載上の違いも考慮しながら、堀に関する記事をまとめると、当時の西堀の堀幅は10間（約18m）～12間（約22m）程度で、城郭側の岸（東岸）は土手と堀を伴い、西岸は詳細不明であるが、両岸ともに石垣を伴っていなかったことが推察される。今次調査においても、TP3で検出された堀西岸跡は前面に石垣を伴うものの、出土遺物等から石垣は近代以降の改修によるものであったことが分かっている。東方へ屈曲する部分の岸の形態については、調査区上の制約から明らかにできていないが、その解明については今後の調査へと譲りたい。

なお、今回の調査では、最上層において、終戦直後に堀を埋め戻した際の堆積層が検出され、被熱し変色した瓦片や煉瓦等の被災遺物が多量に出土した。これらは高知大空襲当時の市街地の状況を物語るものであり、太平洋戦争の実態を現代に語り継ぐ貴重な歴史資料となっている。

2. 堀西側の景観と変遷

本報告に重なる部分もあるが、以下では、内堀跡以西の検出遺構について各期の概要をまとめ、周辺遺跡での発掘調査成果、文献史料とも照合させながらその性格について検討したい。

(1) 17世紀

17世紀代の遺構では、調査区南東部のTP8内で検出したSX2がある。全体の規模や形態は確認できていないが、東西2.6m南北4.4mを超える大型の遺構であったことが予想され、最下層への粘土や腐食物の堆積などからみて、池や水溜まりなど當時水が溜まりやすい環境にあった遺構と考えられる。出土遺物が僅少であるため年代を特定し難いが、16世紀から17世紀初めの遺物が含まれており、廃絶年代は17世紀初頭以降におくことができる。この中には、16世紀末～17世紀初頭に生産された志野焼などの茶の湯に供される陶磁器や、16世紀前半に生産された中国景德鎮窯の古赤絵皿など希少的価値をもつ貿易陶磁器が含まれており、所有者の茶の湯への嗜好や高い経済力が窺われる。

SX2の検出位置を、寛文9年（1669年）の『寛文己酉高知絵図』（Fig.47-図1）と照合させてみると、内堀の屈曲部との位置関係からみて、該当位置は「福岡内添」屋敷の南西端にあたると考えられる。17世紀代における該当地での居住者の推移は前節にて触れた通りで、『侍町小割帳』にある沼津氏以前の居住者の氏名や性格は不明であるが、正保年間（1644～1648）絵図等の内容によって、17世紀前半から当区画が侍屋敷となっていたことが分かっている。今回の、SX2での景德鎮窯の古赤絵皿、志野焼などの出土からみて、該当地とその近隣には、高い経済力をもつ武家の屋敷が江戸初期より存在していたことが推定できよう。

(2) 18世紀

18世紀の遺構としては、TP9で検出した大型の性格不明遺構SX1があり、検出位置は南に隣接する高知城伝下屋敷跡発掘調査区との境界近くにあたっている。調査区上の制約から、全体の規模や形状を明らかにできていないが、南北確認長2m、東西確認長7.3m、深さ80cmを確認している。SX1は埋土中に焼上ブロックと炭化物を多量に含み、最下層には多量の瓦片が廃棄されている。この最下層より出土した瓦片は被熱によって赤変したものが多く、陶磁器にも被熱の痕跡を留めるものが含まれる。出土した陶磁器は17世紀初めから18世紀前葉の肥前産陶磁器などであり、これらの内容からみてSX1は廃絶年代を18世紀前葉頃に求めることができる。

類例の遺構を周辺遺跡にみてみると、南に隣接する高知城伝下屋敷跡^(注12)、北側に近接する高知城跡西堀地区旧営林局跡地点^(注13)、西側に面する西弘小路遺跡^(注14)でも、同時期頃の焼土と被熱遺物を含む廃棄土坑や瓦溜が検出されており、一帯で火災関連の遺構が確認されている。

こうした周辺遺跡での状況や、SX1の埋土及び出土遺物の内容等から、SX1は大火災の直後に崩壊した建物の瓦礫や陶磁器類を廃棄した遺構であることが推定されるが、その形態や規模に不明な点があるため、火災後の片付けに伴って新たに掘削された大型の廃棄土坑か、あるいは、屋敷地の溝など既存の遺構内に火災後の瓦礫を廃棄したものであったのかについては疑問が残る。そこで、隣接する高知城伝下屋敷跡との関連性や、文献史料からつかめる対象地の立地条件などについても触れ、参考としたい。

まず、高知城伝下屋敷跡の調査地点は、元禄11年(1698)の大火で一旦焼失したことが『南路志』『皆山集』所収の記事から推察されているが、発掘調査で検出された焼土層(X層)、火災に伴う瓦溜(瓦溜8)からは18世紀前葉の遺物が出土しており、享保12年(1727)大火に伴う火災廃棄資料の可能性が高いとの報告がなされている。^(注15)今次調査区のSX1も同様の遺物内容で、高知城伝下屋敷跡との関連性を考慮すると、同じく享保12年の大火に伴う片付け跡の可能性が高い。

また、前節までにみてきた文献史料の内容によると、元禄11年の大火の段階には、今次調査地点には「長屋彦太夫」の屋敷があったが、長屋氏屋敷は元禄11年に焼失し、それ以降当地点は堀端の縁地となっている。こうしたことからみると、享保12年大火の段階まで、当地に屋敷跡等の遺構が残存している可能性は低く、SX1は火災後の瓦砾を廃棄するために掘削した廃棄土坑の可能性が高いと思われる。

ところで、これらの瓦砾類がどこからもたらされたのかについては特定し難いが、内堀の西岸に接する縁地という立地条件からみると、侍屋敷よりは、城郭内あるいは近隣の藩閥連の施設から廃棄された可能性が高いと思われる。

(3) 19世紀

この時期の遺構としては、調査区北東部のTP6で検出した円形土坑SK1・2と瓦溜1、調査区南東部のTP8で検出した瓦溜3・4があり、SK1・2が18世紀末～19世紀、瓦溜1が19世紀中葉～幕末、瓦溜3・4が19世紀前葉に比定される。今次調査区では特に、瓦片と多量の陶磁器・土器を廃棄した19世紀前葉の一括廃棄遺物が目立ったが、これらの廃棄遺物の性格を考えるにあたって、瓦溜4出土資料での遺物組成(Tab.18・19)を取り上げて検討しておきたい。

瓦溜4の器種組成(Tab.18-A)をみると、まず、江戸前期のSX2に見えたような奢侈品や茶の湯関連の陶磁器は認められず、供膳具、調理具、貯蔵具、暖房具、火具など日用の生活用具が主体を占めることに気付く。また、城下の中級～上級武士の居宅にあたる金子橋遺跡廃棄資料^(注16)(Tab.18-B)に比較すると、陶磁器では、金子橋遺跡で紅皿、うがい茶碗、饅水入れ、醤油壺、段重など化粧具が豊富に認められたのに対し、瓦溜4ではそれらが乏しいという特徴がみられる。また、瓦溜4では香炉、仏飯器、神酒徳利などの神仏具が乏しい点にも違いが表れている。一方、土器では、金子橋遺跡で土器小皿が突出して多いのに対し、瓦溜4では焼塙壺、焜炉、七輪、火鉢が多い傾向がある。焼塙壺や土製焜炉・火鉢類の多さは、高知城伝下屋敷跡や北側の高知城跡旧營林局跡地点でも同様で、こうした点から瓦溜4の遺物組成は、武家の居宅よりも、藩閥連の施設における遺物組成に共通点がみられている。

さて、前節で触れた様に、本調査地点では嘉永2年(1849)に馬場が新設されているが、それ以前、18世紀初めから19世紀前半までの期間は、堀端の縁地であったことが史料から明らかとなっている。このため、19世紀前葉の廃棄遺物である瓦溜3・4については、外部から不要になった瓦片や陶磁器類が持ち込まれたと考えられる。当時の近隣の状況をみると、南側に接する今の高知城伝下屋敷跡の地点は天保元年(1830)絵図では「御番所」となっており、また南西の地点にも19世紀以降「御厩」が設けられるなど、周囲に藩閥連の施設が存在している。前述のように、瓦溜4の遺物組成が武家の居宅のものとは傾向が異なる点からしても、近隣の藩の施設や城内から廃棄物がもたらさ

れた可能性が高いと思われる。

18世紀前葉の廃棄土坑SX1の事例に同じく、当地点には19世紀前葉にも瓦や陶磁器類などの多量の遺物が持ち込まれ廃棄された。城郭の西に立地する堀端の縁地は、防災的な目的をもつ他に幾つかの機能を果たしたと思われるが、ここでは災害や建物の取り壊しなど一度に大量のごみが生じる突発的な事態に際して、その空間がごみ捨て場として利用されている。こうした在り方についても堀端の空間利用の一侧面を示しているものといえよう。

[註]

- 1)『高知城伝下屋敷跡－高知地家簡裁官舍敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター2002年
- 2)『高知城跡旧営林局跡地 現地説明会資料』高知市教育委員会2005
- 3)『高知市戦災復興史』高知市1969年
- 4)『高知市戦災復興史』高知市1969年より転載
- 5)『史跡高知城跡－丸ノ内縁地試掘確認調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター2006年
- 6) 平成2年作成、平成13年修正『高知広域都市圏38』
- 7) 国立公文書館内閣文庫所蔵
- 8) 高知市立市民図書館所蔵。『慶安五年高知郭中絵図』は慶安4年に作成され翌年公儀に差し出した絵図の控え図であるとされる。(大脇保彦「高知城下町絵図について－歴史空間の情報源としての吟味と課題」『土佐女子短期大学紀要8』土佐女子短期大学2001)
- 9) 高知県立図書館所蔵。『高知城図絵』に描かれた内容は、屋敷の位置関係などからみて17世紀代のものとみられる。
- 10) 大脇保彦「高知城下町絵図について－歴史空間の情報源としての吟味と課題」『土佐女子短期大学紀要8』土佐女子短期大学2001
- 11) 高知市立市民図書館平尾文庫所蔵。
- 12)『高知城伝下屋敷跡－高知地家簡裁官舍敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター2002年
- 13)『高知城跡旧営林局跡地現地説明会資料』高知市教育委員会2005年
- 14)『西弘小路遺跡現地説明会資料』高知市教育委員会2007年
- 15)『高知城伝下屋敷跡－高知地家簡裁官舍敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター2002年
- 16) 浜田恵子「金子橋遺跡出土遺物の様相」「金子橋遺跡」高知市教育委員会2008年

[参考文献]

- 『高知城伝下屋敷跡－高知地家簡裁官舍敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター
2002年
『史跡高知城跡－丸ノ内縁地試掘確認調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター2006年
『高知城跡旧営林局跡地現地説明会資料』高知市教育委員会2005年
『高知市戦災復興史』高知市1969年

Tab.18 瓦窯4陶磁器・土器の器種別出土点数と組成比

	種器	陶器	陶磁器計	陶磁器中の 比率%	土器(瓦質・土師質・ 施釉土器)	陶破器・ 土器計	A.高知城跡 陶磁器・土器中の 比率%	B.金子精進跡 陶磁器・土器中の 比率%
中碗	36	15	51	36%		51	21%	19%
小碗	10	6	16	8%		16	7%	8%
小杯	10	1	11	6%		11	4%	6%
小皿・五寸皿	14	4	18	9%	10	28	11%	10%
中皿	1		1	1%	9	10	4%	2%
火皿								
鉢	5		5	3%		5	2%	2%
鏡口	1		1	1%		1	0.4%	3%
鏡裏	2		2	1%		2	1%	1%
蓋台								
楕錐		2	2	1%		2	1%	3%
環錐・片口		1	1	1%		1	0.4%	1%
鏡(行草・上鏡)		6	6	3%		6	2%	1%
羽釜					1	1	0.4%	
焼燈					1	1	0.4%	
土瓶・急須		12	12	6%		12	5%	0.2%
燐鎗利								
瓶(徳利・その他)	4	9	13	7%		13	5%	2%
水注								0.1%
茶入れ								0.1%
蓋・堀	3	3	3	2%		3	1%	2%
蓋物	7	7	7	4%		7	3%	2%
洗塩壺					7	7	3%	
火消し壺					1	1	0.4%	1%
焼炉・七輪					9	9	4%	
火鉢	6	6	6	3%	2	8	3%	0.6%
灯受倒黒	19	19	19	10%		19	8%	3%
香炉								0.5%
仏壇器								0.1%
神酒樽利								
紅皿	7		7	4%		7	3%	0.9%
うがい・茶碗								0.5%
便水入れ								0.1%
愛油壺								0.5%
合子								0.1%
段重								
水滴	1		1	1%		1	0.4%	0.9%
筆筒								0.1%
灰窓とし								0.2%
火入れ								0.8%
鉢窓口・ 鳥の水入れ	1	4	5	3%		5	2%	0.2%
横木鉢		2	2	1%		2	1%	
人形					6	6	2%	0.9%
ミニチュア		2	2	1%		2	1%	
十輪								0.5%
土器皿・杯・鉢					6	6	2%	24.5%
不明		2	2	1%		2	1%	2%
計	92	101	193	100%	52	245	99%	100%

Tab.19 瓦窯4陶磁器の生産地別出土点数と組成比

	鹿茶山系 肥前窯・ 肥前系	戸・ 美濃 西系	鍋器計	尾山窯 又は 能茶山窯	肥前窯・ 肥前系	瀬戸・ 美濃窯	京焼・ 京都系	信楽	筒内系	備前	昂	在地系・ 不明	陶器計
中碗	1	24	11		36	13		1	1	1			15
小碗		7	1	2	10	2				2	1		6
小杯			10			1							1
小豆・五寸皿		14			14	2	2						4
中皿		1			1								
大皿													
鉢		5			5								
網口		1			1								
碗盤		1	1		2								
蓋台													
擂鉢											2		2
投鉢・片口						1							1
湯						1						5	6
(行方・土瓶)													
土瓶・急便						1						11	12
潤滑剤													
瓶・ドリ	4			4	1	4				1		3	9
水注													
茶入れ													
壺・甕											1		2
亞物				2				1		4			7
火鉢							6						6
灯籠明皿								19					19
香炉													
仏教器													
淨酒器													
紅皿	7			7									
うがい茶園													
愛水入れ													
柴油壺													
合子・段盆													
木桶	1			1									
簞笥													
灰おとし													
火入れ													
銅錫 鳥の水入れ	1			1	3							1	4
樺木鉢							2						2
ミニチュア				2									2
不明												2	2
計(点)	1	76	13	2	92	26	9	0	9	21	2	6	1
%	1%	82%	14%	2%	99%	26%	9%	0%	9%	21%	2%	6%	1%
												25%	101%

写 真 図 版



調査区遠景（西より）



TP2 瓦砾出土状況（南より）



TP3 堀西岸検出状況（東より）



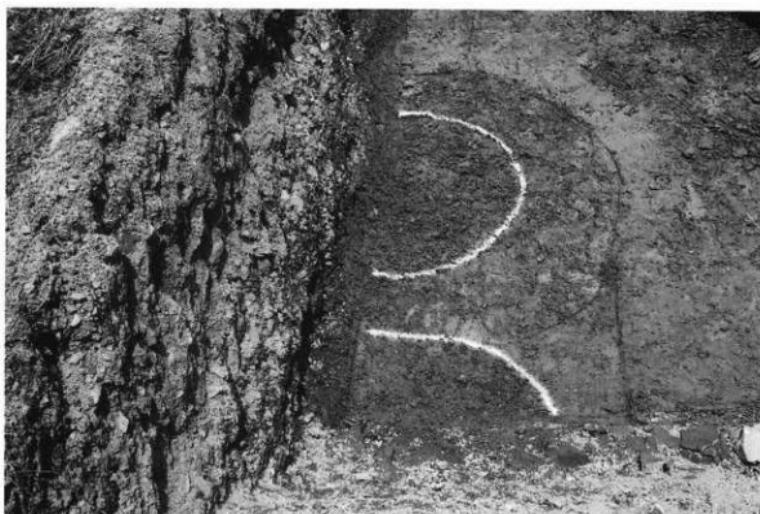
同 石垣出土状況（東より）



TP3 石垣出土状況（南より）



TP6 完掘状況（南より）



TP6 SK1・2 検出状況（西より）



同 SK1 遺物出土状況（南より）



TP8 瓦溜 4 遺物出土状況（北より）



同



TP8 瓦罐 4 遺物出土狀況 (326)



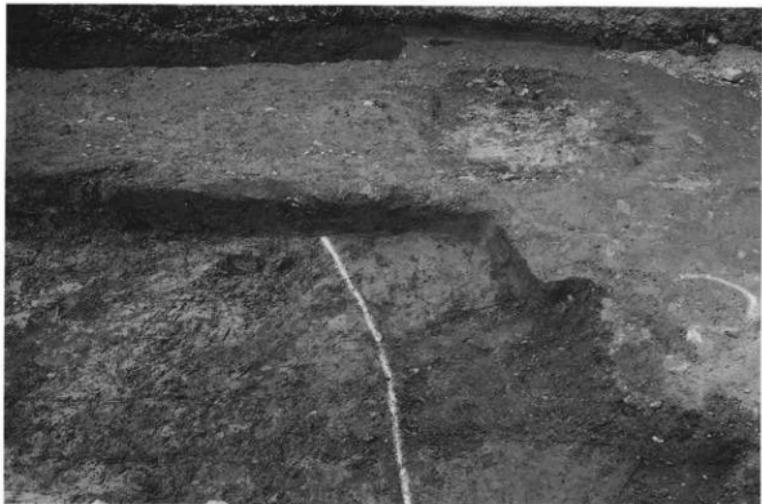
同



TP8 南壁



同 SX2 セクション



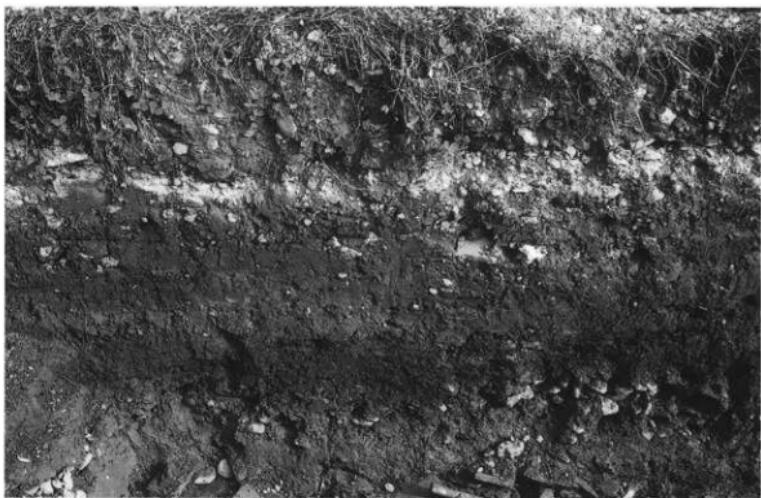
TP8 SX2 検出状況（北より）



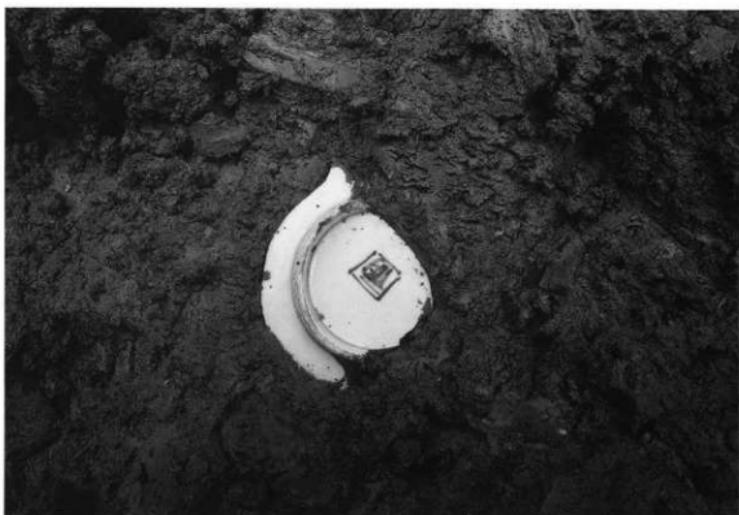
同 P1 棚出土状況



TP9 焼土層（SX1-1 層）検出状況（北西より）



同 南壁セクションと焼土層



TP9 SX1 遺物出土状況 (336)



同 セクション (南より)



TP9 SX1 セクション (南西より)



同 (南東より)



SK1 遺物出土状況 (6)



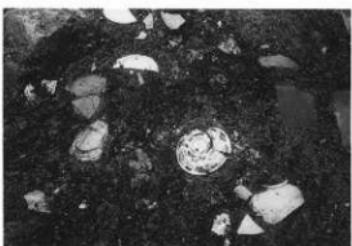
瓦溜 4 遺物出土状況 (286)



同



同 漆製品



同



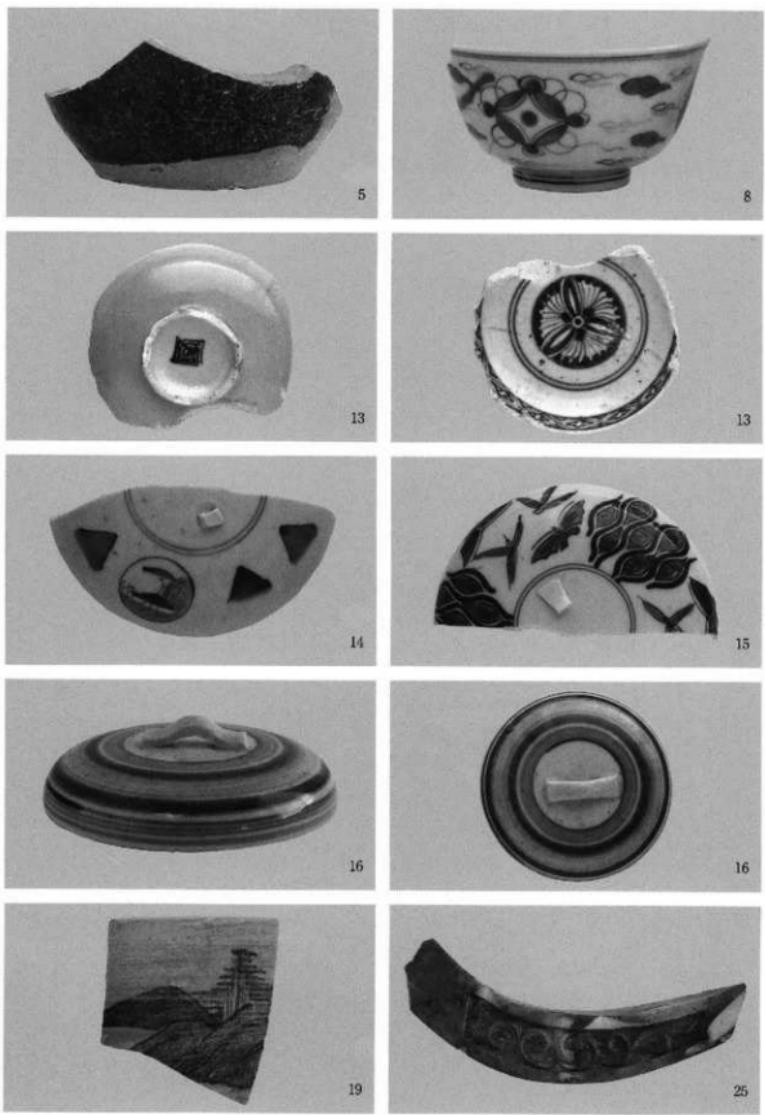
同



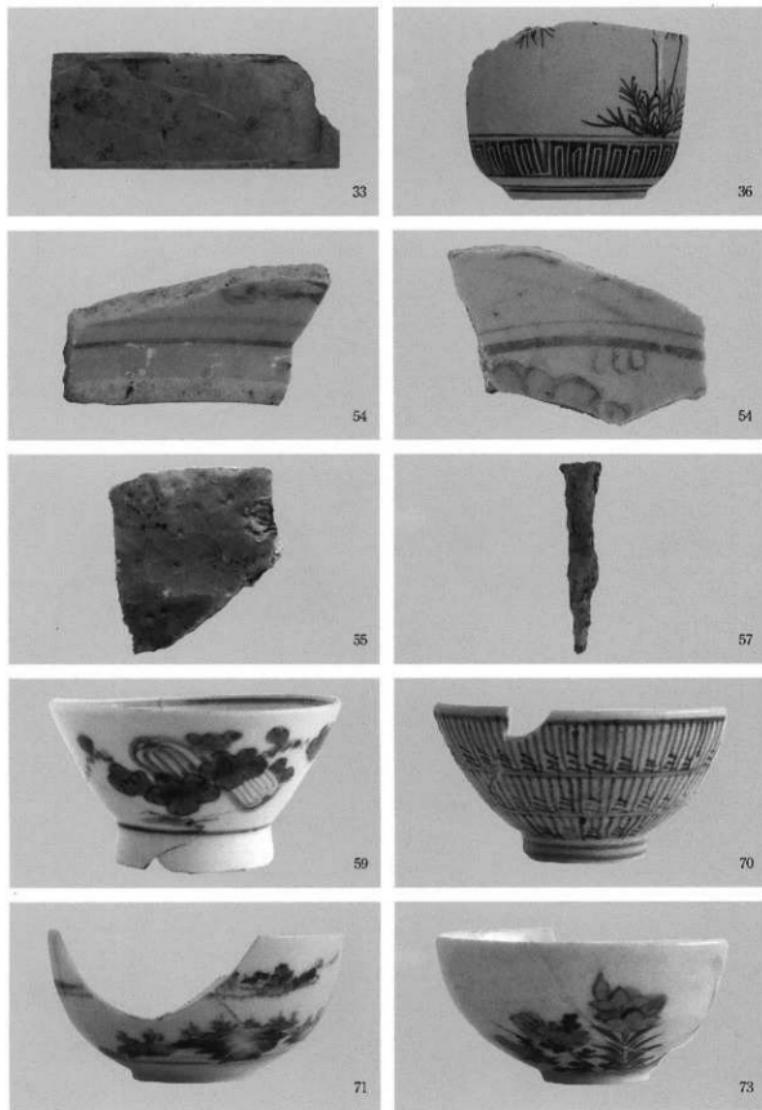
SX2 遺物出土状況 (56)



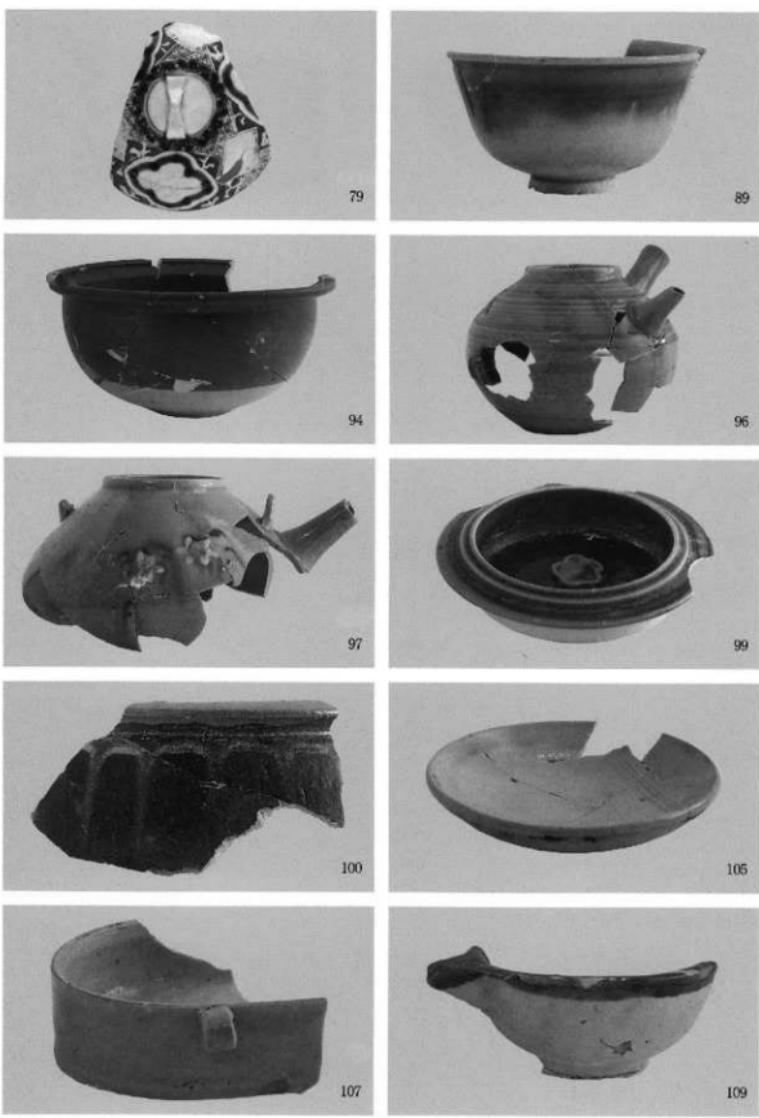
TP8 作業風景



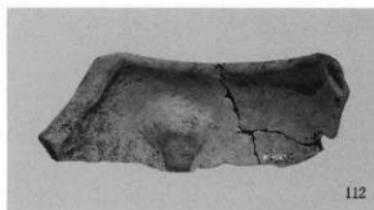
SK1 · 瓦窯 1 出土遺物



瓦溜 1 ~ 3 · SX2 出土遺物



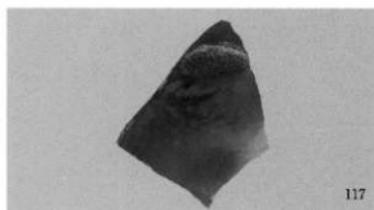
瓦溜 3 出土遺物



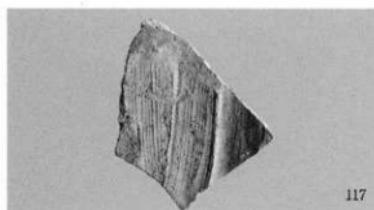
112



114



117



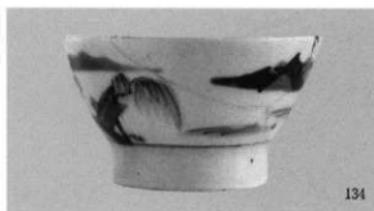
117



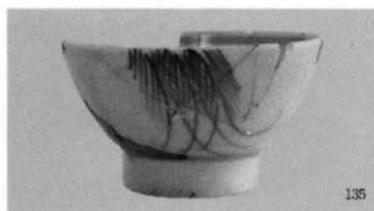
129



131



134



135

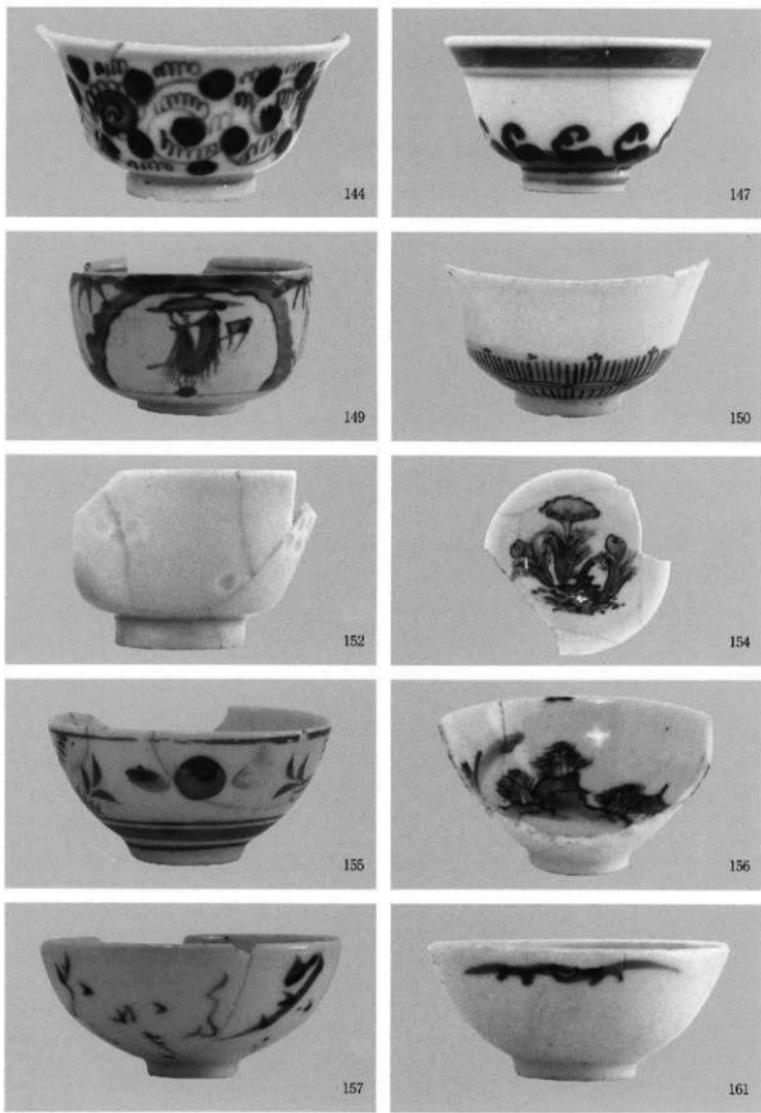


137

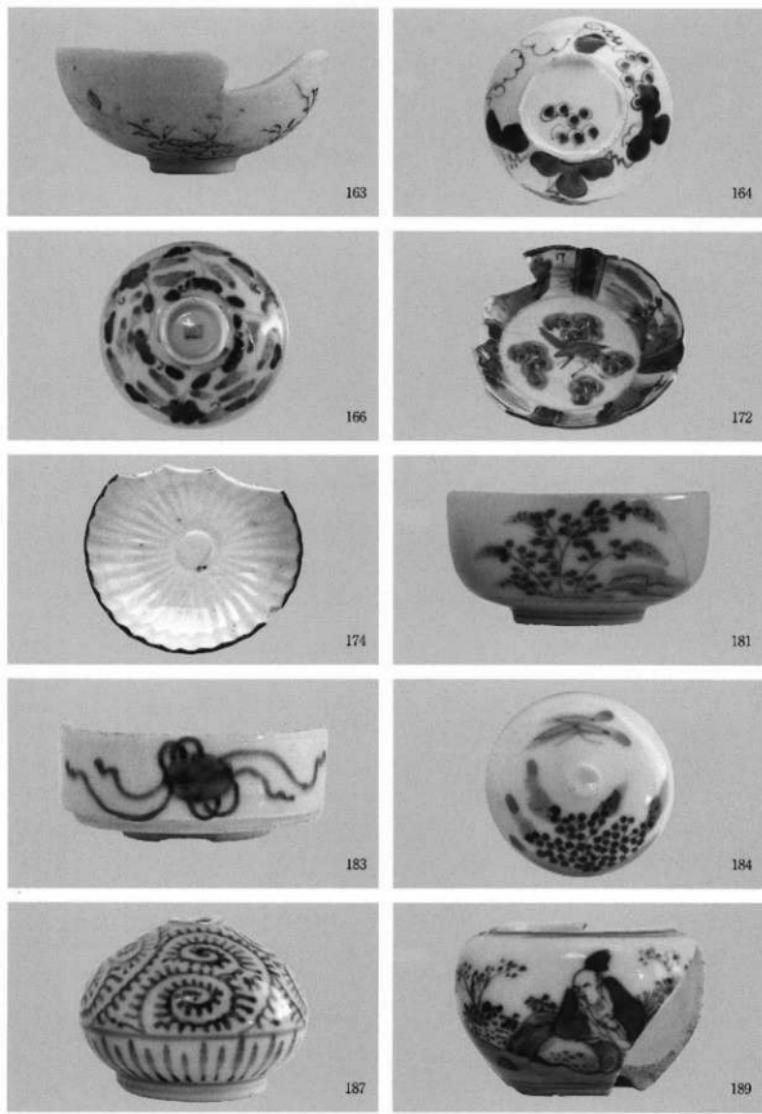


141

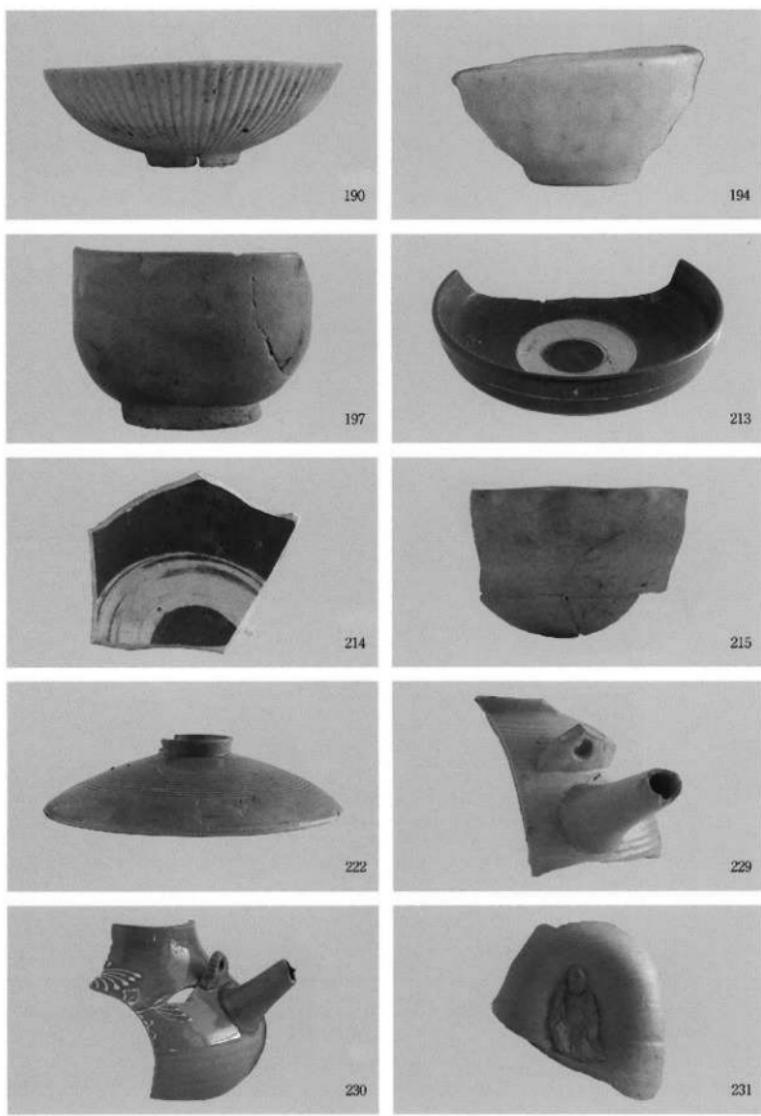
瓦罐 3·4 出土遺物



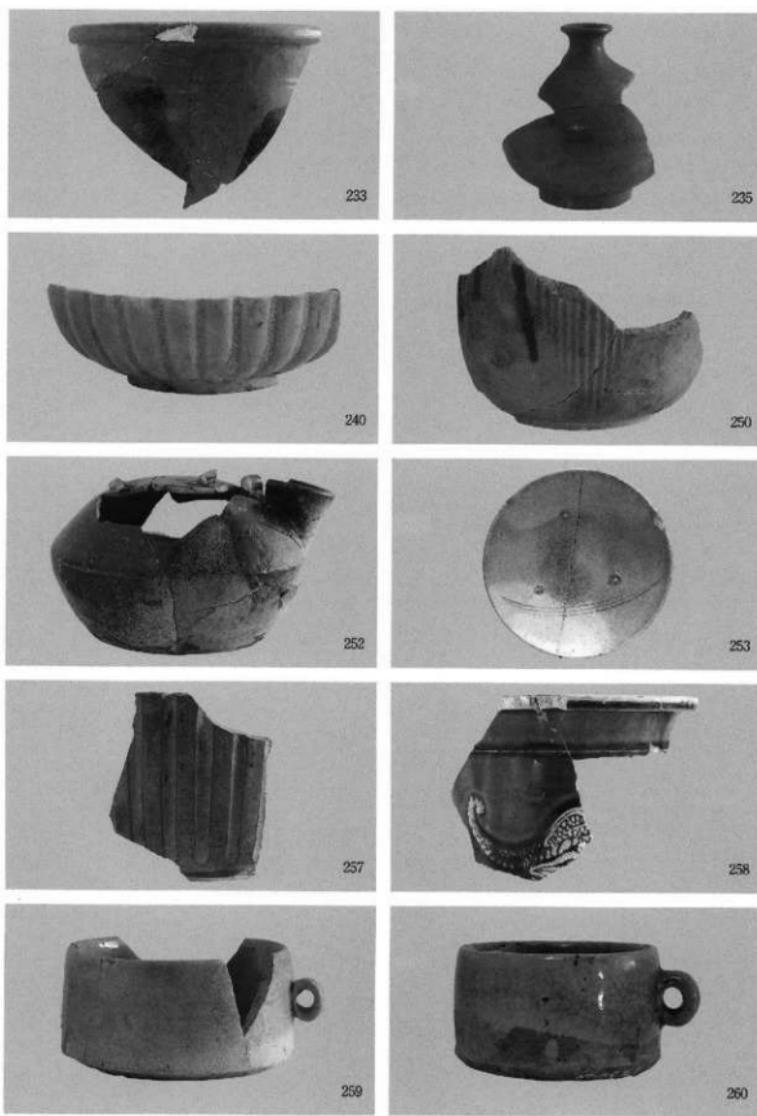
瓦罐 4 出土遗物



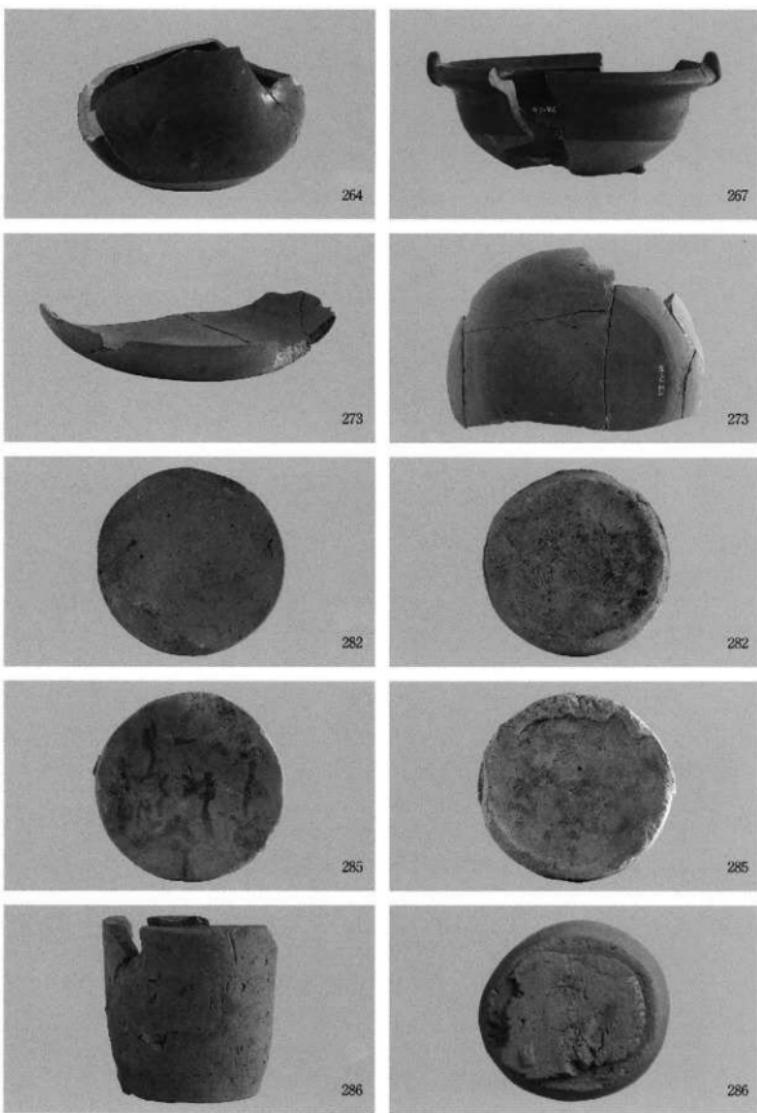
瓦罐 4 出土遺物



瓦窯 4 出土遺物



瓦罐 4 出土遗物



瓦溜 4 出土遺物